

死者の力

津波被災地「霊的体験」の死生学

東日本大震災が起きて十年。折しもこの二年近く新型コロナウイルスのパンデミックに見舞われたために、おのずと震災という自然災害と感染症の流行という公衆衛生学的事態の両方が重ね合わ

せられる時を過ごすことになり、直接的には関係のない両者に時間軸の補助線が引かれることで、問題を複合的かつ総合的に捉えるまなざしが生まれてきた。

本書『死者の力』は、そうした節目となる両義「結論」と長めの「あとがき」に振り返って見る視座と資料を十分に提供する宗教学の優れた成果である。二人の著者は、ともに若い頃からユングや

第二章「儀礼の力」、第三章「絆の力」、第四章「共同体の力」、第五章「信仰の力」と題されて整合性を持つ体裁となっている。また、それぞれ

心理学的に興味を持ち、博士論文ではユングや宗教心理学を主要テーマにしてきた。また、被災地の霊的体験になぜひきつけられるのか」「被災地の宗教者は霊的体験にどう対処したのか」「被災者たちは亡き人との絆にどう支えられているのか」「霊的体験の地域差はなぜ生じたのか」「被災地の外から来た信仰者は霊的体験をどのように

織的に、総合的に被災地における「死者」の問題を分析し、考察していく。全体は、五章に分かれ、高橋原執筆の「はじめに」と堀江宗正執筆の「結論」と長めの「あとがき」に代えて」とアンケート調査の「参考資料」を加えて構成されている。この点で、本書は学術書ではあるが、一般書のような読みやすさや明白さを備え、広範な読者を捉える門構えを示すことに成功している。

さて、それではその中で身であるが、これまで東日本大震災についての多くの著作はルポルタージュや聞き書きインタビュー、自然科学から社会学や人文科学までの幅広い専門分野からのアプローチと問いかげがされてき

宗教心理学に根差す体系的な死生学的研究として本書は最初のまとまった著作になるだろう。「霊的体験」を語るざるを得ない衝動、しかしその語りは文化的な型や形式や概念枠を伴っている。類型性や共通構造もある。

「霊的体験」を統一的に把握する宗教学的視点

震災十年、当事者や宗教者の「物語的現実」の様相

鎌田 東一

統一的に把握する宗教学的視点と概念はないものか？

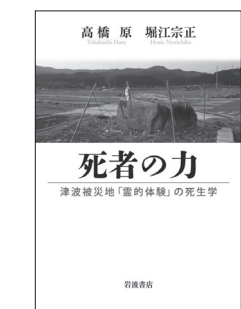
それを本書の著者は「物語的現実」として措定する。「物語的現実」としての霊は「生前の人の概念枠を伴っている。類型性や共通構造もある。

しかし、地域差や多様性も生じて来る。阪神淡路大震災との違いも露出する。それらを串刺しして

のフェーズを浮き彫りにし、立体的にその「物語的現実」の様相と興行きを示していく。その過程で「身近な霊」と「未知の霊」という生者と死者との距離（ソーシヤルかつスピリチュアルなディスタンス）を切り分ける

A市とB市とでは、A市の信仰待ち怪談と宮城B市のコンビニ怪談のアンケート回答の違いを分析する。①地理的要因、②心理的要因、③宗教的要因であった。また、霊の疫病モデル・電磁波モデル・情報モデルという分類視点も興味深いものがあったが、もう一つ、「かたり」（型り・象り）と「はなし」（放し・離し）の違いも考えさせられた。だが、例えば国民的文芸と言え「平家物語」などの生成過程を考えてみると、「かたり」と「はなし」は切り離せない相補的な

関係性があると評者は考えるが、どうであろう。本書を通して、東日本大震災後十年を経て宗教学からの本格的なリポートが「かたり」「はなし」され考察されたことをしかと受けたいと思う。（かまともうじ）上智大学グリーフケア研究所特任教授・宗教学



四六判・348頁・2640円
岩波書店
978-4-00-061489-4
TEL. 03-5210-4000

関係性があると評者は考えるが、どうであろう。本書を通して、東日本大震災後十年を経て宗教学からの本格的なリポートが「かたり」「はなし」され考察されたことをしかと受けたいと思う。（かまともうじ）上智大学グリーフケア研究所特任教授・宗教学

近刊情報
文化読物

◇周司あきら『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』（四六判・二〇〇〇頁・大月書店・12月20日刊）性移行後の実生活に根差して「男性」の範疇でトランス男性をとらえ直すとともに、当事者の視点から新たな見方を提起する。

◇ノーム・チョムスキー／ロバート・ポリン他『気候危機とグローバルグリーンニューディール』（四六・二四〇〇頁・那須里山舎・12月18日刊）チョムスキーと、米政権で再エネ投資計画を監督したポリンが、気候危機を公正に解決するための構想語り尽くす。（早川健治訳）（仮題、予価を含む）